

特集1.

小中高生266人に聞いた！自分への満足度は？

子どもの自信に、友達や家族の関わりがどう影響するのか、そして子どもたちが抱えている悩みはどのようなものかを知るため、アンケートを小学5年生～高校3年生、計266名※におこないました。

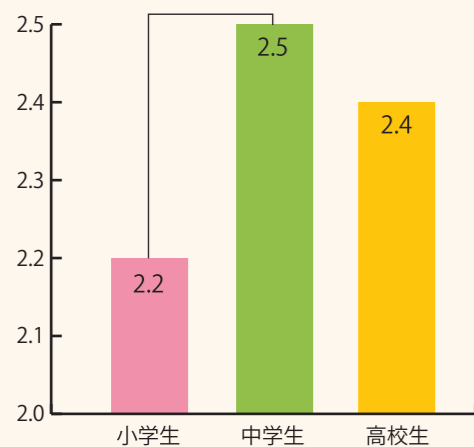
質問には4段階で答えてもらい、回答を1～4点に換算しました。

(そう思う：4点、ややそう思う：3点、あまりそう思わない：2点、そう思わない：1点)

考察のため、質問ごとに小中高の年代別で平均を出し、年代別の有意差がわかるようにグラフ化しました。

※小学生133名、中学生91名、高校生42名 協力：梅花女子大学 福井齊先生（アンケート作成・考察）

Q1. 人の目を気にして自分のやりたいことができないことはありますか？



やりたいことができると回答した子どもの主な理由は「人の目が気にならない・やりたいことは素直にやるべき・気にしたら何もできない・気にしていたら自立できない」といったものでした。反対にやりたいことができないと答えた子どもの主な理由は「陰で何か言われたくない・いじめられたくない・恥ずかしい・迷惑をかけたくない」など、他人からどう思われるかを気にするような回答が多かったです。

【福井先生コメント】小学生と比べて、思春期に入り、周囲の視線や評価が気になり始める中学生が自分のやりたいことができないと回答している傾向が高いようです。

子どもたちのアンケート記述

【ある・どちらかというところ】変な目で見られるから / 劇の練習を大声でしたいのに人を気にして出来ない / 人に笑われたりしたらイヤだから / きつい言葉ぶつけてくる / またいじめられるから / 人に嫌われ、友だちがいなくなったらイヤだから / 自分はクラスでどっちかと言うと浮いている方だから / 人が多いとやりたい事が出来ないときがある / 変な人だと思われたくないから / 「何この人」みたいに思われたらイヤだから

【ない・どちらかというところ】自分がやるとみんなが笑っているけど平気 / やりたいんやったらやったらいいから / 前は一人だけ違うのがイヤだったけど、今は自分の意見を持つてる

なく、関心・意欲・態度など細かく分けて評価をしています。これは、自尊心が高まることも想定できます。ですが、絶対評価となると、△と先生はあまりつけない印象があります。二重丸か丸がつく。そのことが、生徒が自分の主張に甘くなってしまう傾向を強く形成してしまうのではないのでしょうか。

実際には、そんな生徒が大学受験の際に歯が立たず、その落差の中で仮想的有能感をもってしまふ。自分の中の理想と現実のギャップを埋めようとする。

述べたように、格差社会やネット社会が関係してきて、人間関係が薄くなる。親密であれば他人を見下す必要がないわけですが、温かい人間関係ができない、直接的な人間関係ができない子ども・若者が多い。

だから仮想的有能感を脱するためには、親密なコミュニケーション



シヨンの促進と、『とてもよい自分』ではなく、『これでよい自分』としての自尊心の強化が必要になってくると、私は考えています。



速水 敏彦（はやみず としひこ）

1947年愛知県生まれ。名古屋大学教育学部卒。大阪教育大学助教授、名古屋大学教育学部附属中・高等学校校長、名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授などを経て、現在は中部大学人文学部心理学科教授。専門は教育心理学。主な著書に「他人を見下す若者たち」「感情的動機づけ理論の展開 ―やる気の素顔―」などがある。